

まんだら通信

第175号(通巻207号)

平成23年(2011)01月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

お陰さまで・・・

あつという間に一月も三分の一過ぎました。七草がゆが済み小寒に入り、これから寒さの本番になりますが、お元氣にお過ごしでしょうか。

お陰さまで『まんだら通信』も一七五号になります。第一号は平成八年七月です。早いで十五年目に入りました。

「つまらないものを、毎月読まされる方の身になって欲しい」という人もいます。ですが、幸いそういう都合の悪い話は、わたしの耳には届かず、大抵は「来月号を待ってますよ」というお言葉が、道端で、メールで、電話で、お手紙で届きます。或いはまた、『あそか基金』や『まんだら通信』にお力添えを戴きます。



根が無精者のわたしが、こうして続けて来られたのも、このような励ましがあつたからこそです。七十六歳のわたしの人生を一日にたとえれば、日は既に山の端に隠れようとしています。

また、自分では大丈夫と思つていても、頭の配線に不具合が起きるといふことも十分あり得ます。

そうならないように気を付けているつもりですが、不思議な縁で生かされているわたしですから、その先のことは仏様に総てお任せということにします。

何れにしても、わたしが理解していることを、自分の言葉で、お釈迦さまやお大師さんの『お心』をお伝えして行くつもりでおります。その心というのは、大ざっぱに言えば「自分も他人も一緒に、心安らかに生きる」ということだと思つていきます。

ですから寺寄りといいながら、仏教のことに限らず、その時の世の中のことであつたり、政治の話題であつたり、読んだ本についてであつたりしますが、何れも仏教という物差しをあてるとこのように理解できるのではないか、ということになると思ひます。

未熟ゆえに上手にお伝えできないことの方が遙かに多いのですが、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

新年のご挨拶が長くなりました。今年卯年。

この国はこのところ円高、デフレ不況で就職難、家庭崩壊など、暗い話題に眼が行きがちですが、ピョンピョンと元氣になるような年になるといいと思ひます。

私たちは日本の中にいて、よその世界を余り見ません。ですから、私たちが不思議に思わないことが、世界から見ると

おかしいことに気付かない、そういうことがあります。

例えば、改心したのなら謝りますが、全共闘、つまり学生運動過激派のリーダーだった人が総理大臣と官房長官です。

その菅総理大臣は、今は体面上「そんなことはありません」といつていますが、日の丸と君が代が嫌いです。

日の丸と君が代は日本という国そのものから、「わたしは日本国民ではありません」といつているに等しいわけですね。国旗国歌に反対の人が首相をしている国が、日本以外にあつたら教えていた

ほしい、そう思ひます。何故こんなことになつたのか。アメリカは戦争には勝ちましたが、日清日露の戦争を含めて、日本人の強さにはとほと閉口しました。

ですから、連合軍の最高司令官マッカーサーの任務は、当たり前ですが日本が二度と立ち上がれない様に作り替えることでした。それが「日本は侵略国家だつた。無謀な戦争を實行したのは軍国主義者だつた」という教育です。

この薬が効き過ぎて、未だに日本は悪かつたと思つている日本人が大勢います。

これが真つ赤な偽りであることは、幕末から大東亜戦争までの歴史を、学校では教えませんから、自分で勉強すれば成程と納得できます。

日本は性根を据えて世界の役に立つて欲しい、と思つている国は沢山あります。今でも日本は絶大な信用があるので

そのマッカーサーご本人は、帰国後アメリカ議会の公聴会で「あれほど追いつめられれば、日本に限らずどんな小国でも武器をとつて戦つたであろう」と証言しています。

◆『まんだら通信』と横書きの題字の下に年号が四つ並んでいます。一番右の皇紀は今年から追加しました。

ご存知の通り、神武天皇ご即位の年からの年数ですね。そんな文字もない神話時代の話は信用できない、という人も当然いるでしょう。けれども、どこの国も神話時代からの歴史を学校で教えているので、それをしないのは日本だけだとか。

何れにせよ、今の陛下まで125代、直系の元首が続いている国は、日本以外にありませんね。世界中の元首が、若し一堂に集まることがあれば、日本の皇室が一番

の上席ということが、世界の常識だそう。それより、何故これほど長く続いているのでしょうか。

それは、権力からは出来るだけ離れ、質素な暮らしを心がけ、明けても暮れても国民の幸福のために祈り続ける、そのお姿があるからですね。

仁徳天皇の故事「かまどの煙」にあるように、歴代の天皇が積み重ねてきた伝統ですね。◆こんなことを書くせいか、わたしを右翼だという人たちがいるそうです。

意味がよくわからないのですが、黒シャツを着て軍歌を流し、大声でがなり立てるやくざさんの

仲間と思われては迷惑です。

誰もが自分の親は世界一、自分の生まれ育つた国が一番よい国。当たり前のことを言っているだけです。

そして、改めて歴史を、少し勉強し直したら、今までよりも立派な国だと思つた。これを右翼とは言わないのではないのでしょうか。◆寒に入り、益々寒さがつのる季節になりますが、さすがに南国です。日だまりのそこここにと足早くスミシが咲いていました。今朝の気温は3度。

呉々も風邪引きにご注意下さいませよう。

2011.01.09 龍渉



余滴

第六十一話 おむすびの日

この頃、学校の先生の「事件」が報道されていますね。でも、なんだか報道するほうもおかしいような気がしませんか。これは、この問題にかぎりませんが、猫が人間に噛みついて記事にはならないが、人間が猫に噛みつくともニュースになるというマスコミの卑しい根性から、すべて、一方的で「先生が悪いとおもしろい」という観念が先にありきって感じがします。

話題になったセクハラ・サイコロの先生だって、その担任のクラスの生徒も親も、むしろ慕っていたというじゃないですか。もちろん、生徒にキスなんかしたこともない。その話を耳にした他のクラスの親が、マスコミに訴えたようですね。詳しいことはわかりませんが、マスコミは、そのあとのことすら報道しない。

でも、はつきり言って、親もいけないところがありますねえ。ある小学校で、発表会をやることになって、クラス全員で「桃太郎」をやることになったら、配役で大変だったそうですね。親が文句を言うんだそうですね。

「なんで、あの子が桃太郎で、うちの子がサルなんですか」って。ひとりの親が声をあげたから大変です。「あなたの子はまだいいわよ、サルに似てないこともないから。でもうちの子なんか、鬼よ」だって。「鬼は架空の人物だからいいじゃない。うちの娘なんか、まだ七つなのに、もう、おばあさんよ」なんて。

結局、先生方が集まりまして、結論が出ました。出演者、みんな桃太郎。

桃から生まれた桃太郎。あつちこつちの家で桃から桃太郎がオギャーオギャーと生まれます。場面は変わって、桃太郎は大きくなって三人の桃太郎を連れまして、「桃太郎ヶ島」に出かけます。無事、その島に渡って、囚われの身になっていたたくさんの桃太郎を連れて帰ってきて、めでたし、めでたしと言う……。

今日は、学校と地域や家庭の間にそうしたギクシャクした関係がないようにと、一生懸命がんばっているある街の先生方やPTAの活動をご紹介します。

そんな先生方やPTAのお父さん、お母さんがいらつしやるのは、埼玉県八潮市。埼玉県と言っても東京と隣接している人口約八万人の市です。

この街は大変に素晴らしいところで、もう二十年前から「生涯学習都市宣言」を行い、生涯にわたって楽しく学んでいくことで、人と人のふれあいを深め、家庭から地域へ連携の輪を広げていっているんですね。

そうしたなかで、私がとても気に入った話がありますので、ご紹介しますね。それは、市内の小・中学校で一年に二回ある「おむすびの日」です。

「なんだ、それは？」と思われるかもしれませんが、文字通り、その日は給食はナシ、すべて生徒が昼に「おむすび」を食べる日なのです。

目的は「おむすび」をおりこんで、
①おむすび（食）を通して、親子の絆を強く結ぶ

②むかしから食べてきたお米を大切に、日本食の良さを見直そう

③すきなものをばかり食べていませんか？
か？食べ物が無駄にしませんか？

④びようきから自分の身体を守る食生活を考えましょう

というものです。

でも、誰だって、ここまでは考えられますよね。ところが、これを実行に移すとなると大変です。なぜなら、いろいろなことが起こるからです。ちよつと、あげてみましょうかね、こんな意見が生徒の親から出たら、あなたは答えられますか。あなたが先生だったらどうお答えになるか、考えてみてください。

「なんでおむすびなんですか。めんどくさい」「学校やPTAで勝手に決めたことで賛成できません」「何のためにそんなことをするのかさっぱりわからない」「給食費は二分減らしてくるのですか」「朝早くから仕事をしているので、そんな時間はありません」「牛乳でおむすびですか。せめて、味噌汁にしてください」「中学生でおむすびでは足りないでしょう」「昼休みにコンビニで買わせていいですか」「弁当ではいけないのでしょうか」……。

大事なことを先に書いてしまいますね。八潮市や市の教育委員会、さらには市立の小中学校の先生方全員が、この問題ひとつひとつに真正面から向き合ったことが、いまでもこの「おむすびの日」が続いている理由です。

「何故おむすびか」という質問に対して「おかあさんの質問、当然です。でも、よく聞いてくれました。おむすびって、家で簡単にできますよね。小学生でもできます。おかあさんが朝、お忙しかったら、お子さんに作らせてください。もちろん、ふたりでつくって持ってきてくれたらうれしいですよ。そのふれあいの時間、それが、ふたりの心が結ばれる。それが、『おむすび』なんです。パンだと、『バーン』と割れちゃうかもしれないからね。最後の『バーン』は私がつけくわえました。」

「給食費は減らせません。でも、その分、ふだんの日の給食に一品増やすとか工夫をしますよ」「味噌汁、そうですね。冷たいおむすびでは胸がつかえちゃいますね。考えておきますね。貴重なご意見、ありがとうございます。汁物をつけましょう」こんな風に、ひとりひとりの親にたいねいに対処した結果、どうですか。生徒や保護者から素晴らしい反応が起こったのです。

「遠足のように喜んでいた」「親子で楽しくつくりました」「食べる量がわかってるので、残す子がいなくなつた」「給食に比べ、食事の時間のおしゃべりが増えた」……。

でも、先生方は決して気を抜きません。「あの子の家庭環境だと、おむすびを持つてこないかもしれない」と思った先生はその日、いくつものおむすびを作つて、隠し持ち、誰にもわからないように、その子に渡したそうです。

八潮市の皆さん、まさに生涯学習。これをきっかけに家庭と地域が一体となつて、さまざまな運動をすすめているそうです。昔から、こんな言葉がありますよ。「喜ばば喜びごとが喜んで、喜び連れて喜びに来る」

まさにこの言葉は、八潮市の市民ひとりひとりのキャッチフレーズかもしれませんね。